

死

岩代 服部 貞子

何家かの一番鶏が、夢のやうな聲を擧げたのにつれて、思ひ出したやうに、後の家の鶏も鳴いた。

一枚だけ繰られてある雨戸の中だけに、末稍々廣く庭に投げたあかるみに、敷石の下駄は寒むげにうつし出されて居る。一寸ばかり積つた雪に、二の字の跡入り亂れて續く母屋には、物音もなく只鍋の影瓶の影臺所にのみ灯が赤い。

枕邊の人々は猶沈黙を續けて居る。白メリヤスの襯衣の袖口ながく、顔の青い、鈍い目の、何處となく田舎染みた、筒袖の若者は此家の養子で金次郎と云ふ。其斜向ひに、角顔の鐵漿黒く、小さな丸髻に少なからず白髪の見える、でつぷり肥つた縞の羽織の人は、五年程前に死んだ連れ合ひの妹で、今し方六里ばかり在の婚家から、車に揺られて驅けつけたところである。其時人々が、つひ今し方すやくと、低語いてから、

彼れ此れ一時間近くにもなるのだが、此儘覺めずにしまふのではないかと疑はれるまで、蒲團の中は靜かである。煙草入れを膝に握つて、片手を袖に通した前額のと、ぼんやりとした皆の顔が一様に此方を向く。いたく面裏れのした身重の此家の嫁は、睡眠不足の瞼を腫らして、絶えず肉體の内部から襲ひ來る惰氣に、揺々と揺れては、我と我身を支ふるに苦心して居る。種々な小箱やうの物が乗つてる古びた箆笥の前に、窮屈らしい座つて居るのは、菓子職人に嫁して居るといふ姪と其連れ合ひ。宵からの火氣や人いきれに、無暗にせまい隠居所には、有明の寒氣も襲はず、洋燈の壺の油のみが著しく減つて居る。

人々は猶沈黙を續けて居る。今一老婆の死を待ちつつあつて、其死の聲の、如何な幽かなのをも聞き洩らすまいとのやうに、期せずして人々の心は靜寂をつくつた。十の眼は絶えず、注ぐともなしに堆高い蒲團の上に注がれて居る。色は黄ばんで頬骨徒らに高く、目

はどぢたれば其底光りも偲しのばれぬ、半面暗い其顔の撮る人々の胸には、確かに哀愁の影が宿つた。けれども其死を悲しむのでは無い。といつてまた、老婆が從來の行爲——剛情な、苛酷な、其鋭い利刃に觸れた折々に、早く死ね！と願つて居た、其願が今叶はうとして居ても、それを喜ぶ心は更に起らうとはしなかつた。死んだ其後にこそ、今此枕邊に待す人々は勿論老婆が過去の行爲を知る人々の多くは、何とはなしに重荷を下したやうな胸のすきを感じるのであらうけれど。

並木續きの町端れに、馬競買場の廣地を前に展開二間間口のさゝやかな店を出して棚には、蠟燭、塵紙、早附木の類を綺麗に並べ、柱には行田膏の看板見える瓦葺の低い家は、此地一體の木葉葺茅葺に對して、倉の家と町の人の稱つて居る、見かけによらぬ小金持である。子のない此家の妻女は、養子の面倒を見れないので有名であつた。素生は會津藩の何とやらで、兎に角整然とした立居振舞に、會津訛りの抜けぬ言葉遣ひ切爐の灰に線目をたてゝ、灰搔きはいつも横座なる我

前に置くもの、隙さへあれば茶箆筥や戸棚の拭き掃除と、それも自分でなくては氣に合はぬ性分。初め連合ひの甥の十歳ばかりになるのを育てゝ居たが、其子は年々に痩せて来て、終には喰物盗んで喰べるやうになつたのを、人の善い夫は多くを言はないで、其儘實家に送り届けた。今度は困窮つて居た自身の姪を連れて来て、それでも足掛二年、何かにつけて苦い顔を向けて居たが、姪のお豊はだされるまでもなく、隣家の菓子職人と逃げてしまつた。

其後、出る者、出される者、それに池に入水つて死んだ一人を交せて、取り替へた養子は七人と數へられた。いづれも初めの三月や半年は、珍らしさに、天から授かつた養子でゝもあるかのやうな待遇をするが、一年と起臥に馴れては、飽きやすい其性質は、顔見るのも厭といふ程、嫌つてやまないのが常態であつた。しかも一面に潜んで居る苛酷な性質は、それを罵り、苛んで、飽くことを知らなかつた。子を育てあぐる親の苦心、憂慮を知らぬ女は、彼れの大切なる財産を

賭して、子とは恁んなものと、勝手に胸に鑄た型に、
箝まる者を得やうとしたのである。得て其型に箝めや
うとして、片手に捧げて居る財産の重みに比較べて、
まづ其者のあまりの軽ろきに慊らなく、箝まらなかつ
た其者を投げ出すに躊躇しないのが、彼女の心の常態
であつた。

かくして老いた女は、世人の憎悪、良心の恐怖に反
抗ついで、益々意固地な老婆となつたのである。

喘息で、連合ひに死別れてから恰度三年目、倉の家
のおみな婆は、罰が當つて彼様になつたと、口さがな
く言ひ傳へられた。それは或日俄に卒倒してから此方
手足の自由を失つて、舌の廻りも思ふやうでなくなつ
てからで。其時はそろ／＼今の養子にも飽いて來て、
例の隠嶮な眼光を研ぎかゝつて居たのであつたが、こ
れ幸ひと本家の計ひで、遮に無に母家と離れた隱居所
に押し込められてしまつたのであつた。月日の立つに
従つて、彼女が心外で／＼堪らなかつた、憎い嫁の世
話を逃れて、大小便の始末は自分で出来るやうになつ

たが、意固地は益々募つて、勝手から運ぶ煮物さへ箸
もつけずに突つ返して居た。

もう雪はあるまいと心をゆるして居た日和續きに、
手の裏を返すやうな今日の寒さ、白いものさへ飛んで
來た午後、甘酒の鍋さげて隱居所を訪づれた嫁が、雪
隱の前に倒れて居た老母を見付け出してかくの騒ぎで
あるが、醫者の言を俟たず、集まつた人々は、いづれ
も死の期の近づいたのを見て取つたのであつた。

夜警の拍子木音冴え渡つた夜半、ふと昏睡から覺め
た老婆が、力なく眸を開いた時、人々の顔は一樣に其
方に注がれた。膝進ませて養子の金次郎が何やら言ふ
た。續いて本家の主人も口を動かした。けれども老婆
はたゞ、昵と人々の顔を眺めて居る。木札の未だ新ら
しい藥壇から、薄紅の水を滴らして、其コツプを口の
邊に嫁が手を運んだ時、老婆が口は堅く結ばれて、つ
と閉ぢた目尻から、白露ほろりと落ちて枕にしみた。

我過去の行爲を反省みて、心から我死を追悼む人の
此世に一人もないのを思ひ知つた時、遺恨と、寂寥と

の思ひが、油然いうぜんとして老婆が胸を襲ふたのである。

死の前には誰しも正直である。其涙を悪意に解して今更に老婆が悪むべき性行せいかうを思ひ起す人は一人もなかつた。懺悔——の涙と、恐らく人々はさう思ふて固唾かたづを飲んだのである。

絶え間ない水車の響が、一定の律をなして、哀音あいおんを調べて居る。

怨恨うらみなく、憎悪にくしみなく、たゞ／＼巨大なる死の威いの静しづ寂かさに打たれて、未だ世のきづな断たち得ぬ犠牲者いへしやの前に人々の胸は首低うなだれて居る。

夜は明け放れやうとしてまづ暁あかつきの鐘は鳴つた。

【入力者注】底本は総ルビですが、一部のみ残しました。

底本に行を合せるために、フォントサイズを小さくしたり、半角スペースを挿入した箇所があります。

初出・底本…「女子文壇」明治四十一年二月一日

テキスト入力…小林 徹

公開…令和六年三月二十四日

リンク…「[作品年譜](#)」

[水野仙子ホームページ](#)